

はじめに

紅葉の“もみじ”に降り積もる雪、54年ぶりの11月の初雪には皆さん、さぞかし驚かれたのではないのでしょうか。また、東北大震災を思い起こすような地震もあり、自然界の厳しさに気持ちが引き締まります。原発に大きな異常がなかったことだけが、胸なでおろす思いでした。

今年も残すところ数日、「脳損傷友の会・いばらき」は総会で承認された行事を着々とこなしてまいりました。また、県立リハビリテーションセンター廃止に伴う支援拠点の行く末を案じ、行政、支援者の皆様にもその必要性を訴えてまいりました。11月7日に行われた県への要望書提出には、その訴えに共感して下さった多くの賛助会員の方々が参加してくださいました。大変心強く思います。ご協力ありがとうございました。

今回、広報誌に同封いたしましたJTBLA Letterには「支援普及事業の前進を目指して」と題して特集が載っています。厚生労働省の取組として支援拠点は全国に104か所となり、内容に違いはあると思われませんが、全域に広がりを見せているのです。茨城県もその体制を県立リハビリテーションセンターが担ってくださっています。家族会の活動にもご尽力してくださっています。私達の家族である当事者の方々が安心して地域で暮らしていけるよう、高次脳機能障害の理解と支援が広がることを願い、来年も皆様、声を上げていきましょう。



当会の活動も少しずつですが、広がりを見せてきています。その活動には色々な方々から様々のご支援をいただきました。篤くお礼申し上げます。温かいお気持ちに感謝するとともに、来年もどうぞよろしく願いいたします。

事業報告

要望書提出



11月7日（月）（会員10名、 賛助会員4名参加）

丹羽会長から要望書についての説明の後、会員から当事者についての原因や今までの経過、現在の状況また困っていることや不安に感じていることなど発言してもらいました。

障害福祉課の方々は、年々高次脳機能障害について理解が深まってきているように感じました。特に担当者が変わらないで対応してくれることは心強く、診療、治療、リハビリ、就労（復学）と順調に進められるような体系が早くに作られることを切に願います。

家族会からは、今後も積極的にかつ根気強く要望を伝えて県下全域に対策や支援が行われるように働きかけていきたいと感じています。

丹羽会長から高塚課長に要望書の提出 （写真を撮る茨城新聞社斉藤明成記者）

[提出先]

県保健福祉部障害福祉課
高塚課長
村田副参事
網倉課長補佐
中島係長

県立リハビリテーションセンター
小原相談指導課長
浅野支援コーディネーター



1. 高次脳機能障害支援センターの設置と支援体制の構築
 - (1) 高次脳機能障害センターの設置
 - (2) 高次脳機能障害を持つ小児や中学・高校生へ対応できる拠点病院、支援センターについて
 - (3) 総合的リハビリテーションセンターの設置
2. 地域資源の基盤整備について
高次脳機能障害者に対応可能なグループホーム、ショートステイの充実
3. 就労支援について
4. 障害特性に基づく防災対策について

<< 支援体制構築を早く実現してください。（家族会からのお願い） >>

<<要望書提出の会合に参加して>>

賛助会員 加藤 萬嬉子

11月7日県庁2階ロビーに会員・賛助会員計14名が集まり、初対面の方もいるので、自己紹介をして開始時間を待ちました。今回新しい会員の笹原さんが来られました。今高校2年生のお嬢さんが5歳のとき発達障害という診断で薬を飲んで治療をしてきたが、最近高次脳機能障害だという診断を受け、薬を減らしながら活動していると話されました。

時間になり11階の会議室に向かいました。障害福祉課の方4名、県立リハビリテーションセンターの先生2名が来られて始まりました。

昨年同様、丹羽さんから課長に要望書を手渡すところを茨城新聞の記者の方が写実を撮るところから始まりました。自己紹介をした後、丹羽さんが「何年も要望をしているがあまり進展がなく、家族も長年の介護で大変な思いをしているので少しでも早く支援体制を充実させてほしい。」と切実な訴えを述べられました。次いで会員から息子さんやお父さんの現状について話を聞きました。



細川さんの息子さんは最近雇用を打ち切られ、次の仕事をさがしているが大変厳しい状況で、事業所などに高次脳機能障害についての理解を深めるよう働きかけをお願いしたいと話されました。浅野さんから筑波記念病院に設けられた「家族会相談室」について説明がありました。役員が第二金曜日に家族からの相談にに応じているが、最近病院の専門職の方に支援してもらえるようになり心強いとのことでした。

時間になりまだお話しが聞けなかった方もありましたが、終了となりました。

十数年前から県南の集会に参加するようになりました。はじめの頃は手探り状態のような感じを受けましたが、今では要望書にあるように様々な活動がなされるようになり、本当にすごいことだと思いました。行政の方には真剣に取り組んでいただき、要望のひとつでも実現されることを願うばかりです。

第 2 回茨城県高次脳機能障害者支援システム整備協議会

11月2日、県立リハビリテーションセンターにて開催されました。

高次脳機能障害者支援コーディネーター山中氏の先進地調査報告広島県の事例の報告がありました。広島県は、広島県高次脳機能センターが一極集中型の支援拠点機関になっており、他に7カ所の医療機関を指定して均一な支援体制を整えています。

センターの役割として、

- ①診断・評価
- ②リハビリテーションプログラムの実施
- ③生活自立支援、就労支援
- ④家族支援
- ⑤普及、啓発活動



を担っています。

また、高次脳機能障害専門病棟を設立しより効率的な訓練が可能です。また、敷地内には障害者支援施設、医療型障害児入所施設、医療型児童発達支援センター、医療型障害児入所施設、身体障害者福祉センターが併設されています。

広島県支援体制の特徴として、

- ・拠点の中で、診断から支援（生活支援・就労支援）を一体的に行うことによって、手帳の更新等で長期間関わりを持てる。（フォローアップの充実）
- ・障害支援施設での機能訓練や就労移行支援等と並行しながら、専門病棟での認知機能回復訓練を受けることによって、総合的なリハビリテーションが可能。
- ・医療領域と福祉領域の連携によって、一体となった連続した支援が提供出来る体制作り。

一方今後の課題として経営上の問題や、コーディネーターが入院患者への対応に忙殺される、支援施設の定員割れなどが挙げられていたとの報告でした。

議題としては、今後（平成30年度以降）の地域支援システム整備について熱心な意見交換をしました。

<会議出席者>

協議会委員：

茨城障害者職業センター工藤修一氏、SW 飯島望氏、医師河野豊氏
PT 斉藤秀之氏、医師大仲功一氏、OT 寺門貴氏、医師山川百合子氏
家族会丹羽。

県立リハビリテーションセンター：

萩野谷センター長、小原相談指導課長、井坂機能訓練課長
小松崎就労支援課長、支援コーディネーターとして寺門主任・浅野技師
山中技師・清水囑託。

県障害福祉課：村田副参事、中嶋係長

第2回高次脳機能障害事例検討会

去る10月7日午後7時より、筑波大学付属病院にて開催されました。

今回のテーマは、高校2年生の事例（5歳の時の発症で発達障害と診断され投薬を受けてきて、中学3年になり初めて高次脳機能障害の診断を受けた方です。）について意見交換しました。作業療法士、理学療法士、特別支援学校教諭の方々、当事者の両親、長く関わって下さっている言語聴覚士の方、放課後デイの職員の方々そして当会会員など多彩な顔ぶれで計21人の参加がありました。



県立リハビリテーションセンター

新任支援コーディネーター紹介

師走に入り、身を切るような寒さが続いています。このたび県の高次脳機能障害支援相談窓口の担当として配置されました廣末と申します。以前は児童や高齢者、他の障害分野などで従事し、茨城県では初めての勤務になり、ときどきワクワクもしています。

これまで十数年、色々な職場で福祉に携わってきた中で、皆さんに共通していたのが、お一人お一人に生活があり、そこに関わるご家族や関係者の方がいらっしゃり、そして、これから先の方向性が見えない部分で悩んでいらっしゃることでした。

反対に、それぞれに異なった生活課題がある点では、決して定まった形のあるものではないということも実感してきました

その意味では、高次脳機能障害はまさに様々な状態の方がいる障害であると感じています。これまで懸命に社会生活を歩んでこられた方、そしてそのご家族等においては、不安や困難な思いを抱かれておられると思います。そして、困難の抱え方には人それぞれの違いが伺えます。

この度、本職に就くにあたり、一人でも多くの方と、それぞれの想いを分かち合い、手を携え、支えとなれるよう努めていきたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

廣末 宗一郎

コラージュ教室に参加して

卒業論文をコラージュの効果というテーマで書くために、脳損傷の会いばらきのコラージュ教室に今年の9月から参加させていただいて、月に1回コラージュを作成しています。



それまではコラージュといえば写真というイメージしかなく、自分が作ることになるとは思ってもみないことでした。実際に作ってみると、とても楽しく様々な作品を生み出すことができました。特に切り抜きをしたが使わなかったものが、後からに作品になくってはならない存在になったり、とりあえず貼ってみたものが1番の存在感を示したりと自分の思考を超えたものが無意識に生まれる感覚がとても楽しいです。

また新聞の折り込みチラシなど普段なら捨ててしまうものを保管するようになりました。今まではお得な商品を知らせてくれるだけの存在だったものが、コラージュの材料という違う役割を担うようになったのです。このように普段とは違う見方をできるようにもコラージュを通してのことでした。

コラージュは作るだけでなく、みんなで共有できる点も素晴らしいと思いました。あまりうまくできなかったと感じている作品もみんなの前で発表をすることで、作っているうちは気付かなかったことに気づいたり、参加者の方からの言葉をいただいて新たな面に気付いたりしました。さらに他の方の作品を見ることで新たに気付くことも多く、次の作製時のアイデアになったりします。

このような体験を通して普段は捨ててしまうようなものでも工夫や考え次第では作品となると考えるようになりました。私は作業療法士として作業の一環である創作活動などにも携わります。コラージュによって考え方が変わったのは作業療法士として大きな成長だったと感じました。

私は3年生になりますが、当事者やその家族と実際に関わる機会は多くはありません。実習で関わる時はひとつでも多くの情報を得ようと必死になり、場を共有するという体験は初めてに近いものでした。

はじめはたくさんお話をすべきなのかと思い、話しかけていましたが当事者の方のコラージュを作る手を止めてしまいました。そこからは無理に話しかけたりせず自然体で参加するようにしました。すると私も気負いがなくなり、コラージュものびのびと制作できるようになりました。

このように場を共有するということを学び、今後の実習や臨床でも忘れることなく活かしていきたいと考えています。

茨城県立医療大学保健医療学部作業療法学科 酒井勇輔

神栖の広場

体験談を発表して

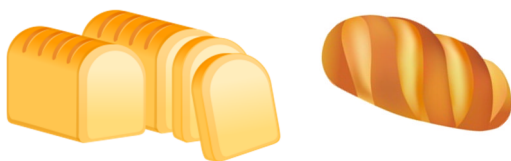
当初の予定数「50席」中、欠席者も出てくることだから・・・と、思っていたところ、76名もの参加者にびっくりしました。そうすると、一段と緊張度アップで、上手に話せるだろうか。

数日前から要点を書き出し、念入りにチェックしたつもりでしたが、案の定、発表前から前の方の体験談に、薄れかけていた急性期の頃が思い出され、つい涙が止まらなくなりました。そんな中でも、思いの半分くらいは伝えることができたかなあ～と、未熟な自分に反省です。

息子の入院時、大変お世話になった保健婦さんたちに少しでも協力できれば・・・と、勇気を出して参加しました。その結果、大勢の人たちに耳を傾けていただき、鹿行地区にも「高次脳理解の輪」が、広まったことを確信しました。そして、この場を設けていただいた保健所さんや、遠方からの協力者、県リハの方たちに感謝したいと思います。

『やわらかな まなざし』

先日、息子がテーブルに置いてあったパンを食べながら、『まるでアンパンマンの歌の様じゃないの?』と言う。そういえば袋に入っていたのはアンパン、食パン、カレーパン全く、気づかなかったけれど心の柔軟さに脱帽です。



高次脳機能障害研修会 次第

日時：平成 28 年 11 月 26 日(金)
13 時 30 分～15 時 30 分
場所：茨城県潮来保育所
2 階 大会議室

- 1 開会
- 2 講義「高次脳機能障害とその支援について」
茨城県立リハビリテーションセンター
相談・指導課主任 寺門 正人氏
- 3 体験発表「高次脳機能障害を考える会」代表
- 4 質疑応答
- 5 閉会

研修会に参加して

研修会の数日後、潮来保健所の担当の方から、「参加した人たちの感想」が届けられました。「多くの参加者から感謝の声が寄せられておりますので、その一部を記します。なお、今後も会の皆様の声を届けていくことが、高次脳機能障害の理解につながるものと思い、私たちの役割のひとつとも考えておりますので、引き続きよろしく願いいたします。」

という言葉が添えられていました。緊張しながらも、聞いていただいて本当の良かったと思えました。

- ご家族が今まで悩んできたこと、どんなことに傷つけられたのか、どんな思いで過ごしてきたのか、テキストでは学べないことを学び、涙が出た。
- ご本人、ご家族が悩みながらも頑張ってきたことがよくわかった。
- 症状の経過や家族の心情をありのまま語ってくれ、感激した。
- ご家族がご本人の自立を考え、前向きに生活している様子がよくわかった。
- 障害を抱えるご家族の苦難さが理解できた。
- ご家族の心労を考えると胸が詰まった。
- 周囲への理解を深めることが重要と感じた。
- ご本人・ご家族に寄り添ってケアができるようにしたいと思った。
- 個々による対応が異なることを実感し、もっと勉強したいと思った。
- （行政職員）ご家族が孤立して、抱え込まずに相談しやすい環境を整備していきたい。
- （行政職員）高次脳機能障害の研修の企画をして、地域の方に理解を深めていただく機会を作りたいと思った。
- （ケアマネ）ご家族に「家族会」があることを周知し、参加を呼び掛けていきたい。



28年度第三回県南集会 “ランチ会”

日 時：11月5日（土）

場 所：土浦社会福祉会館 調理室（ウララ2ビル5階）

参加者：当事者4名 家族6名 支援者1名 合計11名

今回の集会は楽しみにしていた“ランチ会”です。

サンドイッチ、スープ、そしてコーヒーゼリーを作りました。メニューのサンドイッチは、昨年も楽しかったからと当事者からのリクエストで、作業手順も順調に進みました。

まずは買い物班と準備班に別れ作業開始、買い物班は主に当事者が担当で、隣の土浦市役所の地下にあるスーパーへ行きました。そこでも3組に別れ、メモを見ながら品物を吟味する、なかなか皆さん手慣れたものでした。調理室に帰るとこちらも準備万端、お皿も調理器具も揃っていたので、調理開始です。

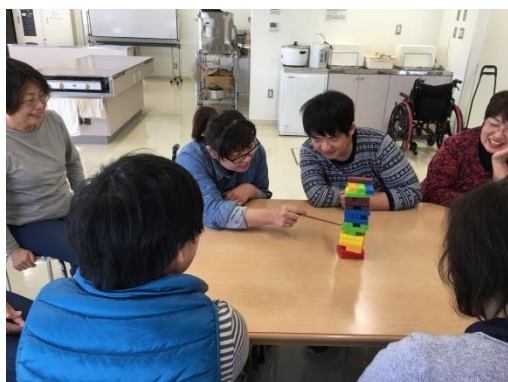
調理は、トッピングの具材を調理する班、野菜を切る班、そして、パン・デザートを用意する班の3台に分かれました。調理中は皆さん真剣です。手に麻痺があっても工夫して、積極的に作業していました。

調理は最高のリハビリになると言います。献立を考え、材料を選び、手順を考えて調理する、美味しく食べられてリハビリになるのであれば、一石二鳥ですね。

一時間ほどでメニューのすべてが出来上がり、テーブルを囲んで楽しく会食、今回も支援して下さった加藤裕子先生とも、打ち解けた楽しいお話しができました。いつも家族会を気にかけていただいて、ありがとうございます。



お楽しみの“ジェンガゲーム”で大盛り上がり！！



就労支援施設訪問

★サポートステーション『オリオン』

施設概要

| | |
|-------|------------------------|
| 経営主体 | 一般社団法人 銀河 |
| 代表者 | 代表理事 山崎明美 |
| 所在地 | かすみがうら市田伏5428 |
| 施設名称 | サポートステーションオリオン |
| 敷地面積 | 983.4㎡(298坪:建物・駐車場・畑等) |
| 延べ床面積 | 92.74㎡(28坪) |

周辺地図



水戸方面からの場合
国道6号線の小美玉市の「堅倉交差点」→国道355号→霞ヶ浦大橋→コストア交差点左折→十字路右折→T字路右折後約70m

土浦方面からの場合
国道354号線で霞ヶ浦大橋方面→かすみがうらOGMゴルフクラブハウスから700m

お問い合わせ

サポートステーションオリオン
〒300-0202 かすみがうら市田伏5428
電話: 029-875-7097 FAX: 029-875-7096
ホームページ <http://www.orion-ginga.com>
受付時間 午前9:00から午後3:00
月曜～金曜日(年末年始・祝祭日を除く)

一般社団法人 銀河
障がい者福祉サービス事業所
サポートステーション
オリオン
peppar くん
待ってます!

利用者・家族が安心して充実した日々を送れるように支援していきます。
★就労移行支援事業(10名)
★就労継続(B型)事業(10名)
★日中一時支援事業

代表者の山崎さんが、個人で立ち上げました。少人数でアットホームな、温かみのある施設でした。



- 平成25年11月にオープン。
- 作業は、単純なものと変化のあるものを用意し、個々の特性に応じた取り組みができるようになっています。
- 現在の利用者は9名で、支援員は4名(基準の2倍)です。
- 障害の重い方には、個別のスケジュールを用意しています。
- 作業での収益は、微々たるものですが、利用者還元しています。
- 地域のお祭りやイベントに参加し、地元との交流を図っています。


- ① 「オリオン」の作業所全景
- ② ボールペンの組み立てグループと雑誌の付録の袋詰めグループに分かれて作業をしていました。
- ③ 1日の予定が目で見えてわかるように、工夫されていました。
- ④ 敷地内の畑。収穫した野菜は、神立方面に売りに行きます。
- ⑤ 代表の山崎さん、施設長の秋山さんと一緒に。



※山崎さんは、当会の会員です。

★おひさま


地図



障害者自立支援センター
障害福祉サービス事業所
就労移行支援 定員20名
就労継続支援（B型）定員18名

おひさま

所在地
〒300-0805
茨城県土浦市栄塚184
Tel. 029-895-4531
fax 029-895-4531
mail ohisama-p@jcom.home.ne.jp
ホームページ <http://members3.com/home.ne.jp/ohisama-w/>
「おひさま」運営法人
株式会社パートナーズ
代表取締役 小林 幸子



人数が多く、活気にあふれ、施設というより小さな工場のような感じでした。



- 平成23年オープン
- 現在の利用者38名。（職員8名）
就労以降支援（20名）
就労B型（18名）
- 軽作業を行って得た収入は、必要経費を除いて利用者に分配しています。
- 月に1回、お楽しみ会を実施しています。
- 就労に備えて「マナー教室」も月に2回実施します。
- 平成29年4月、美浦村に新しい施設がオープン予定とのこと。

- ① オレンジ色の屋根が目印の施設全景
- ② お歳暮用のハムの箱を組み立てていました。
- ③ ボールペンの袋詰めをしています。
- ④ コンクリートを固める時の部品を接着剤でつける作業です。
- ⑤ 就労支援員の小林綾子さんと施設長の小林伸幸さん



熊本県の家族会「ぷらむ」から、支援金に対するお礼状が届きました。22名の方々からのメッセージが綴られていましたが、おひとり分だけ掲載します。

1・Yさん（当事者は息子さん）

前略ごめんなさい。グループホームで生活しておりました息子は、身内に不幸があり自宅へ戻ってきておりました。最初の余震は通夜の帰りの車中で、二度目の本震は自宅で被災しました。本震では、津波警報が出されましたが、地震の揺れで息子の部屋のドアがロックされてしまい、ドアを壊して脱出し、海から少しでも離れようと車で急ぎ、中学校の校庭にたどり着き車中泊をしました。

息子が暮らしていたグループホームは全壊しましたが、障害者枠で市営住宅に入居することができました。お陰様でどうにか生活ができています。仕事の方はまだ決まりませんが、少しずつ進んでいるようです。各団体様より温かいご支援をいただきまして感謝の気持ちでいっぱいです。本当に有難うございました。乱文乱筆をお許しくださいます。



お悔み

当事者会員の が、平成28年10月16日に逝去されました。つつしんでご報告いたします。ご冥福をお祈りいたします。

編集後記

今号では、2つの施設訪問の記事を掲載しました。リハの講習会でお話を聞きし、関心をもったのですが、「百聞は一見に如かず」まさにその通りでした。

通所者の方々が一心に作業する姿、職員の方々がそれを的確にフォローする姿等、実際にこの目で見て感じた事がたくさんありました。

私たちには、それらをお伝えすることしかできませんが、これからも県内の施設を少しずつ紹介していきたいと考えています。

※ この広報誌は、茨城県福祉団体等支援事業費の補助金で作成しています。